

## 成果と課題、成果の普及

三小田 博 昭

### 1 研究開発の実践

SGH研究開発5年次（最終年）である2019年度は、以下の取組を重点的に行った。

- ① 興味関心の育成「課題探究Ⅰ」と仮説検証型課題研究「課題探究Ⅱ」
- ② 国際的素養を身につける「協同的探究学習」の成果普及
- ③ グローバル拠点の効果的な活用法「国内グローバル拠点」の拡大
- ④ グローバル拠点の効果的な活用法「海外グローバル拠点」の拡大
- ⑤ 英語による思考力・表現力を育成するALEの成果普及
- ⑥ 検証評価に関する実践

上記①～③の成果を普及するために、現職教員や教員を目指す大学生・大学院生を対象として、協同的探究学習教員研修会を2019年7月31日（金）に実施した。教員研修会には、全国から44名の教育関係者が参加し、模擬授業、教材作成体験、講演会が行われた。名古屋大学教育発達科学研究科附属高大接続研究センター特任教授大谷尚によって「学びの高大接続」という演題で行われた。今回、初めて行われた教材作成体験は、5教科と音楽、保健体育で行った。内容は以下の通りである。

国語中学：ヘルマンヘッセ『少年の日の思い出』

高校：岩井克人『マルジャーナの知恵』

社会中学：地理「日本の資源、エネルギー問題」

高校：現代社会・政経「選挙」

数学中学：相似「平行線と線分の比」

高校：数Ⅱ微分法と積分法「不等式の証明」

理科学「酸・アルカリとイオン」

英語中学、高校ともに「比較」

音楽中学思いや意図を表現する活動

（合唱）「時の旅人」

体育中高ともに「バレーボール」



関東、関西、山陰から44名が参加し、本校SGHへの関心の高さが窺えた。

(参加の動機)

- ・協同的探究学習の具体的な方法、及び評価方法について学ぶため (山梨県公立高校教員)
- ・自身の教育の向上と自校研究の内容を高めるため (鳥取県公立中学校教員)
- ・分かる学力を伸ばす授業づくり、発問の仕方を学ぶため (尼崎市公立中学校教員)
- ・新しい授業方法を知るため (愛知県公立高校教員)
- ・授業での主体的・対話的で深い学びの向上のため (加古川市公立中学校教員)
- ・自分自身の授業内容の改善並びに生徒に生きる力を育ませるための勉強 (愛知県市立高校教員)
- ・協同的学習の授業づくり (埼玉県大学院生)

(参加した感想や本校への要望等)

- ・私立、公立関係なく、様々な立場で日々奮闘している先生方と交流でき大変嬉しく思います。こういった機会を与えてくださった名大附属の職員の方に感謝申し上げます。公立校はより多様な子どもたちが在籍し、学力の差も非常に大きいですが、自己肯定感を育む、今のままの自分に自信が持てるそのきっかけになるような授業づくりに精進していこうと改めて思われた一日でした。
- ・2学期に実際に探究を取り入れなければいけない(担当者として他の先生方に説明をしなければいけない)ので、とても真剣に参加しました。私でもできるかもしれないと思いました。
- ・非常におもしろい内容が聞けた。様々な生徒に対応できるようにもう少しハードルを下げた内容でも考えてみたい。
- ・展開問題の作り方を学べてよかったです。本校での取組に活かしたいと思います。
- ・協同的探究学習は、生徒や保護者になかなか受け入れられないという実感を持っています。本校の生徒は「分かりやすく教えてくれる授業」を高く評価する傾向にあると思います。本日は、協同的探究学習を取入れている先生方のお話を伺うことができ、大変勉強になりました。と同時に本校ではほとんど行われていない指導法なので危機感を強く感じました。

## 2 2019年度SGHプログラム評価に関わる事項

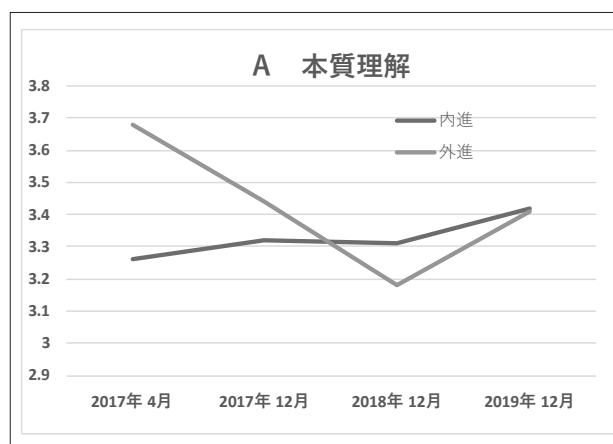
- ① 生徒の意識をはかるアンケート：データの収集  
中学1年生と高校1年生 (4月)
- ② 生徒の意識をはかるアンケート：データの収集

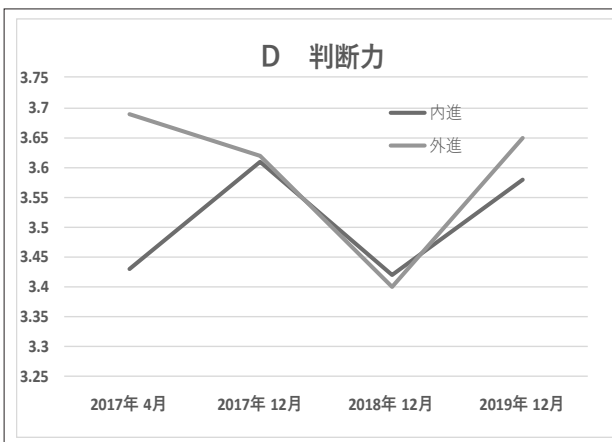
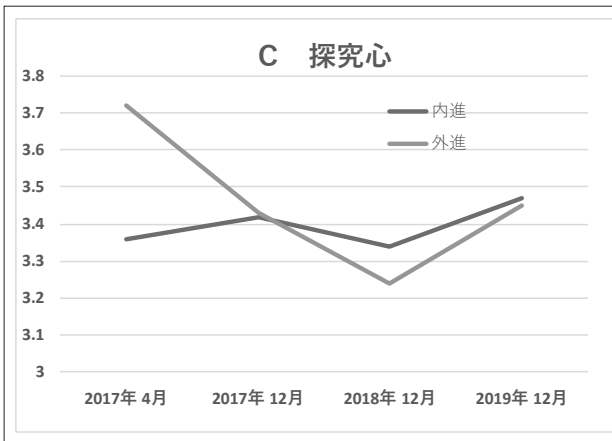
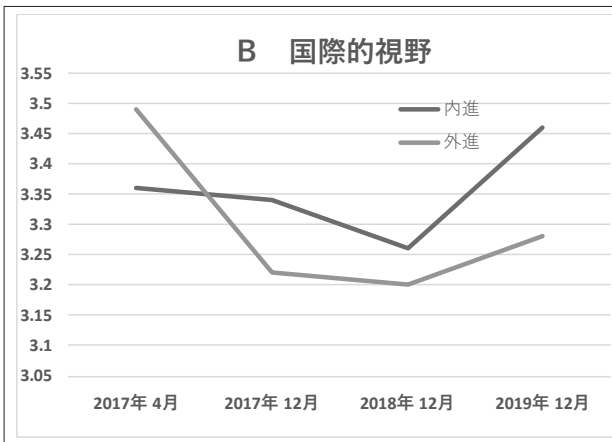
中学1年生～高校3年生 (12月)

- ③ 生徒の思考力をはかる記述型課題の実施：高校1年生 (4月)
- ④ 生徒の思考力をはかる記述型課題の実施：高校2年生 (3月)
- ⑤ 英語力調査：中学2年生～高校2年生 (GTEC for StudentsBenesse)
- ⑤ 生徒学校調査の実施 (12月)
- ⑥ 保護者アンケートの実施 (12月)

### (1) 生徒の意識をはかるアンケート結果

本校は併設型中高一貫校のため、附属中学からの進学者80名に加え、高校から新たに40名が新しく入学する。附属中学生もSGHでは研究開発単位I (国際的視野を持って探究する6年必修課題研究「総合人間科」) や研究開発単位II (国際的素養を身につける協同的探究学習) を経験している。また、中学生全校生徒240名のうち50名程度がGlobal Committee Juniorに所属し、校内で行う国際交流 (主たる活動は留学生との交流) にも参加している。一方で、高校から新たに入学する生徒は、附属中学生が行っているような活動をほとんど経験したことがない生徒が多い。本校では、SGHの成果をはかるため、中学1年生～高校3年生まで毎年12月に「生徒の意識をはかるアンケート」を実施している。加えて、初期値を得るために中学1年生と高校1年生の4月にも「生徒の意識をはかるアンケート」を行っている。下のグラフは今年2019年度の高校3年生が高校に入学した2017年4月～2019年12月までの経年変化 (SGHでつける生徒の4つの力: 「本質を理解する力」「国際的視野」「探究し続ける力」「判断力」) を追ったものである。縦軸は得点 (5:とてもよくあてはまる 4:ある程度あてはまる 3:ややあてはまる 2:どちらともいえない 1:あてはまらない)、横軸は学年 (1年次、2年次、3年次) を示している。内進とは、附属中学から高校に進学した生徒、外進とは附属中学以外から附属高校に進学した生徒を示す。変化が分かりやすいように、縦軸の目盛りはグラフごとに変化させた。





上記のどの項目をとっても、初期値（1年生の4月）時点では、外進生の意識の方が内進生よりも高い。一般論ではあるが、人間関係がすでにできている附属中学からの仲間に、高校入学後、加わるというのは自信と勇気のいることだと思う。本校に入学を希望する外進生を入学試験の面接の様子から判断すると、多くの外進生が高校入学後にやりたいことや、将来の夢が明確に明確にもっている。その点から考えても、入学当初においては、外進生は自分に十分な自信をもっているため、SGH 4つの力に関しても高い意識を持っていると考える。入学当初に行うアンケート調査のため、「自分を高く見せる」とか「自分好印象をもってもらいたい」といったようなシーリングがかかっているとも考えられる。一

方、附属中学から進学する内進生は、中学でも同じようなアンケートを受けていて、新しい気持ちで高校生活を送るといった意識も外進生ほど高くないと思われる。

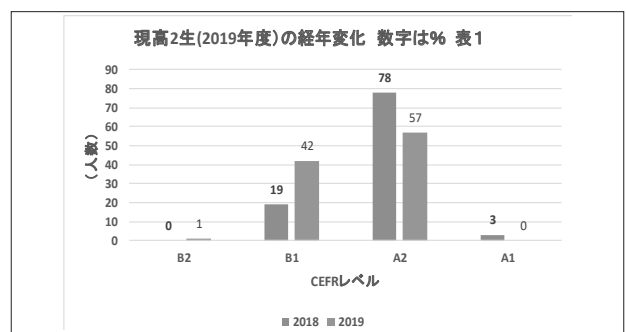
しかし、次第に、PBL入門や課題研究テーマ決定など、多くの外進生が中学校時代にほぼ経験したことがないようなことが課せられるようになる。一方、内進生は附属中学でも課題探究Ⅰの中で集録や研究テーマ決定等をすでに経験しているため課題研究の内容理解も早く、テキパキと教員の指示従う。外進生はこのギャップに悩み、これまで持っていた自信と勇気に陰りが出てくるのだと考えられる。その結果として、意識も急速に低下するものと思われる。しかし、興味深いことにそこから一気に外進生は「V字回復」を見せる。高校2年から高校3年にかけては、課題研究が本格的に開始される。高校1年次の課題探究Ⅱで、探究の方法を学ぶため、探究活動に入りやすいのである。高校1年で行う、PBL入門が効いているのだと考える。そして、最終的に高校3年次において、内進生と外進生の差がほぼなくなり、こと「D判断力」に関しては逆転する。このことから、本校で実践しているSGH研究開発のカリキュラムが非常に効果的に機能していることがわかる。「答えのない課題」に対して探究する活動をしてこなかった外進生が、SGH探究カリキュラムを経験することで、最終的には内進生と同じ高い意識をもって大学に進学していくこととなるからである。高校時代に探究活動を経験してこず大学に入学した学生が、「答えのない課題」について大学で研究する際、ぶつかる壁と同じである。この点からも「高大接続」の重要性がわかる。

## (2) 英語力調査 GTEC for students

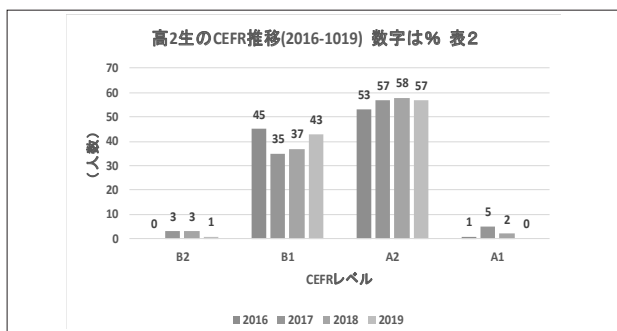
本校では、平成27年度から生徒の英語力を測るためにGTEC for students (Benesse) を実施している。対象学年と試験レベルは以下の通りである。実施は12月上旬である。以下結果である。

CORE	中学2年生 (80名)	
BASIC	中学3年生 (80名)	
ADVANCE	高校1年生 (120名)	高校2年生 (120名)

### 1) GTEC for students 校内分析



(表1)

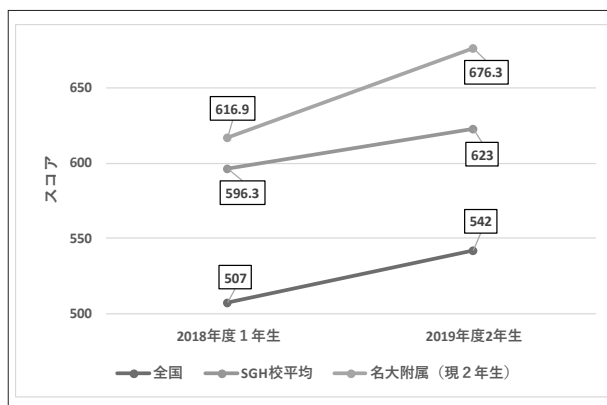


(表2)

表1は本校現高校2生(2019) GTEC for students (ADVANCE)の経年変化(2018-2019)である。2019年度の高校2年生の特徴は、B2レベルの生徒が少ない一方、2年間で、B1→B2の生徒の割合(%)が飛躍的に増えている。また、逆にA2レベルの生徒の割合が減少している。高校1年生から2年生に進級する上で、A2生徒の多くがB1レベルにあがったことを意味している。また、表2は、高校2年を定点として2016-2019の4年間でCEFRレベルがどのように変化しているかを示したものである。2017年度は、英語力の高い生徒と低い生徒の両方がほぼ一定数在籍したが、その後は、ボリュームゾーンであるB1の生徒割合が年々増え、A2の生徒割合が減少傾向にあることが分かる。

## 2) GTEC for students 他校との比較

本校現高校2年生(2019年度)のGTEC for students (ADVANCE)の成績変化を全国の高校生、及び全国のSGH校の高校生と比較したグラフを示した(Benesse提供)。学年があがるにつれ、英語授業での既習範囲が広範かつ高度になるため、1年次より2年次のスコアが高くなるのは、ADVANCEの難易度により適応していくため、ある意味当然のことである。グラフから分かる顕著なことは、SGH指定校の英語力が高校1年次からすでに全国の高校よりもかなり高いことが言える。しかし、その伸び率はSGH以外の高校の35に対し、SGH指定校は26.7と低い。しかしながら本校でのスコアは、高校1年次においてもSGH校平均よりも更に高いことが分かる。これは、この年の高校2年生が特に英語力が合ったからではなく、SGH3年次報告書(P23)でも示したように本校1年生の英語力が高いのは例年の傾向にある。さらに特徴的なことは、その伸び率が、SGH以外の高校やSGH指定校よりも2019年度59.4、2017年度57と飛び抜けて高い。GTEC for studentsは、「これからはますますグローバル化が進むはず。そんな時代にあっても世界と渡り合って活躍できる人を増やしたい、今からの高校生・中学生には本当に使える英語力を身につけて欲しい。(GTEC HPより)」という趣旨で、開発されたものである。言い換えれば、本校の生徒はまさに「使える英語」を身につけていると言うことができる。

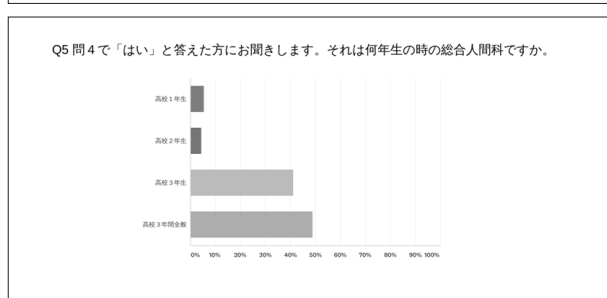
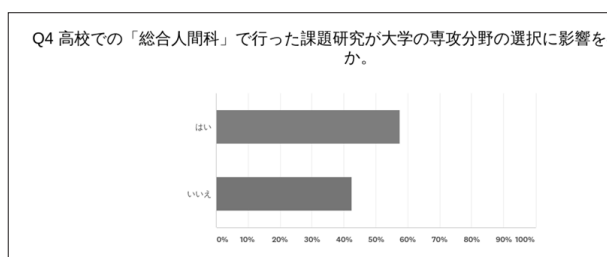


## (3) 卒業生アンケート

オンラインアンケートツールSurvey Monkeyを活用し、卒業生にアンケートをとり集約した(2020.03.03現在)。アンケートに回答してくれた卒業生が158名であり、そのほとんどがSGHを開始した2017年度以降の卒業生である(92.27%)。そのためアンケート結果は、SGH世代の声を反映していると考えた。

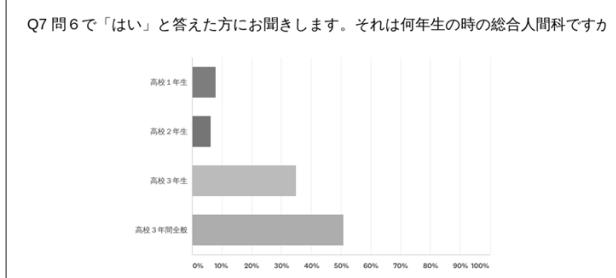
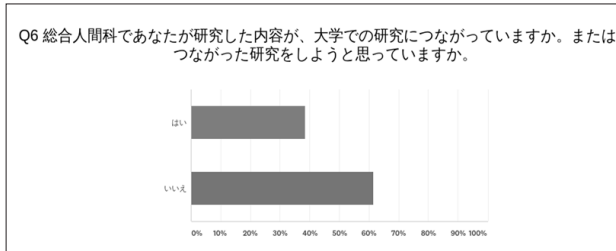
### 1) 研究開発単位 I :

国際的視野を持って探究する6年間必修課題研究「総合人間科」の成果



本校では、「総合的な探究の時間」を活用して「総合人間科 {課題探究 I・II}」を実践している。目的は、課題研究を3年間継続して行う事で、ものごとの本質を捉え、既存の問題と潜在的な問題の発見を行い、論理的・多面的に考える力を育成することである。中学で行う「総合人間科(課題探究 I)」で身近な疑問から地球規模で多岐にわたる内容を取扱うことで幅広い分野での興味関心を育成し、高校での「総合人間科(課題探究 II)」へ移行する。そのため、高校は、早い段階で「研究テーマ」を設定することができ3年間をフルに活用して探究を行う事ができる。実質的に6年にわたって探究を行うため、生徒たちは大学でもっと自分の研究を深め

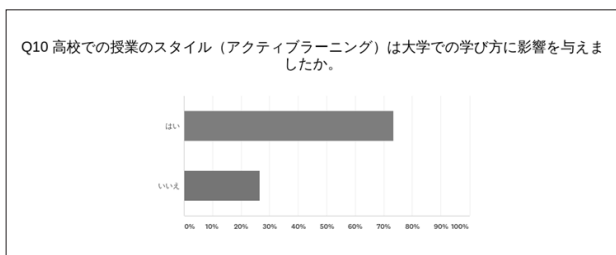
たいと考えるようになったと分析した。そのためには探究活動を高校3年の卒業時まで行うことが必要であることも証明された。高校3年間継続して行う事で、「大学で何を学ぶか」という明確な目標を持って進学することができる。



大学の専攻分野決定には、影響を与えていたが、大学進学後も継続してその研究内容を深めて実践しているかというとその割合は減る傾向にある。しかし、4割の生徒が継続した研究に取り組むといくことが分かった。大学の4年もしくは大学院2-4年間継続した研究をするのなら、10年以上の研究実践を行う事になる。本校がSGHで育成する「自立した学習者（育成するものごとの本質を地球規模で捉え、自分の力で探究し続ける勇氣と判断力のある人間）」に生徒は成長していると言える。

## 2) 研究開発単位Ⅱ：

国際的素養を身につける「協同的探究学習（既存教科）」での成果

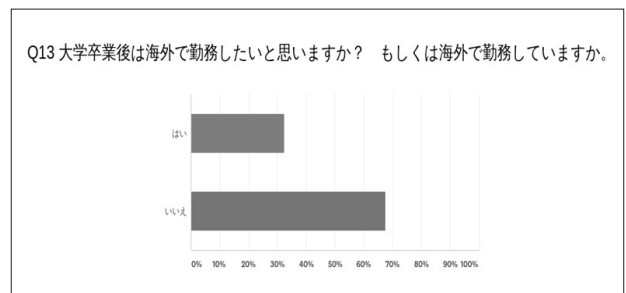
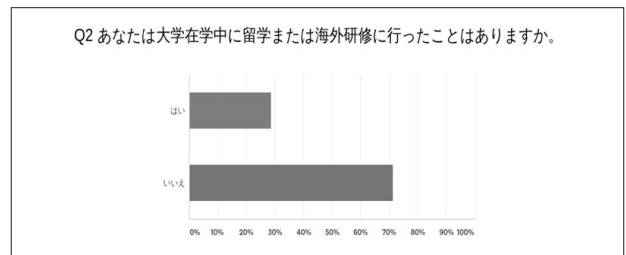


本校では、既存教科において「協同的探究学習（アクティブラーニング）」を実践している。他者とのコミュニケーションを取りながら協同して問題解決をする学習法である。学校全体のカリキュラムを「暗記・再生型」中心の学習法から「理解・思考型」学習法に変換することを目的とした。「教育から研究」へ推移する大学での学びで「協同的探究学習」が大いに役立っていることがアンケート結果から分かる。現在、大学での学びも講義形式からアクティブラーニングへ大きく急速に変化をしている。上記3-3-1（総合人間科課題探究Ⅰ・Ⅱ）

と平行して、高校在学中からアクティブラーニングを経験することによって、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」（平成26年12月22日中央教育審議会答申。）の重要視点：「知識・技能」のみならず、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」や主体性をもって多様な人々と協働する態度といった「真の学力の育成」を行っていると言える。

## 3) 研究開発単位Ⅲ：

グローバル拠点を活用して、表現力や判断力を身につける方法の開発での成果



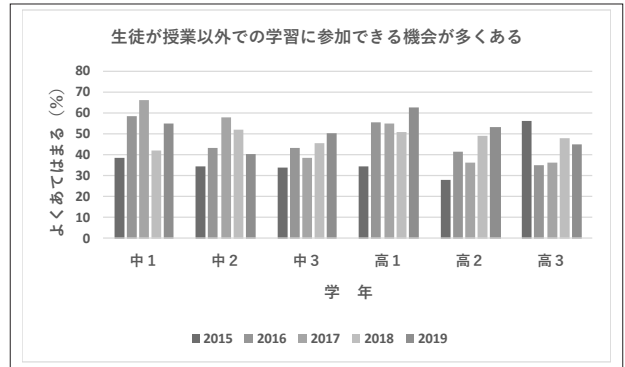
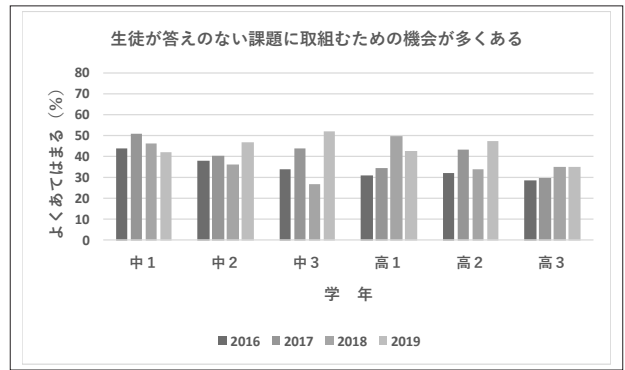
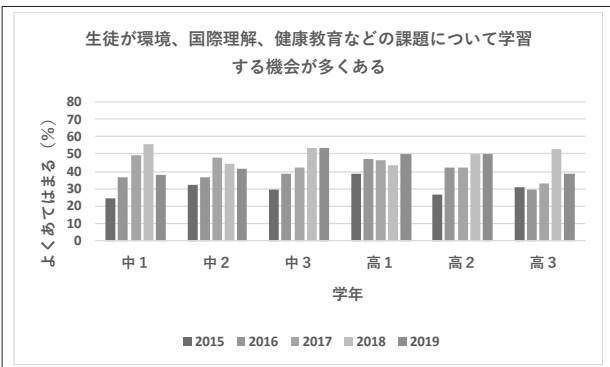
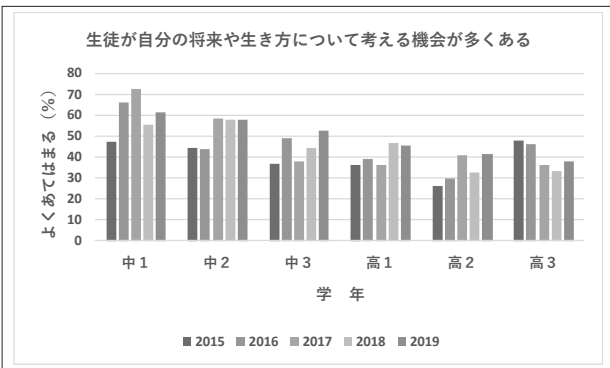
約30%弱の卒業生が、大学在学中に留学または海外研修に行ったことがあると回答をしている。これは、「2014年大学生の意識調査（全国大学生生活協同組合連合会）」での大学入学後に海外に行ったことがある学生の割合26.6%よりもやや多い。しかし本校のアンケートの回答をした生徒は多くが2018年度、2019年度に卒業した生徒が多い。「2014年大学生の意識調査（全国大学生生活協同組合連合会）」でも1年次に留学した生徒は9.1%、2年次に留学した生徒は27.4%、3年次が34.1%、4年次が42.1%と学年があがるにつれ留学生者が増えることがわかる。それと比較すると本校でのアンケート回答者が現在大学1・2年生が多いため、今後大学在学中に留学または海外研修に行ったことがあると回答をする割合が今後増えることが予想される。2019（平成31/令和元）年度新入社員意識調査アンケート結果（三菱UFUリサーチ&コンサルティング）によると海外勤務について「したい」と回答した新入社員は17.0%である。しかしながら本校卒業生は、海外勤務を将来「したい」という回答は30%を越えほぼ倍である。研究開発単位Ⅲ：グローバル拠点を活用した取組が現在、アジア拠点、北米拠点、ヨーロッパ拠点と3拠点あり、毎年合計で30名以上

の生徒を海外で引率しているほか、毎年多くの留学生は本校を訪問し(2019年度は418名)在校生と交流していること。アジア架け橋プロジェクトをはじめ、3か月以上の長期留学生を複数名(2019年度は5名)受け入れているなど多くの留学生と共に学校生活を送る環境があるからだと考える。また、ALE(Active Learning in English)や、アジア高校生国際会議、G30 for everyoneの受講など海外の環境に触れる多くの機会があることが好影響を与えている。

**(4) 保護者評価**

毎年12月に保護者に対して「学校生活環境調査」というアンケートを実施している。アンケートは、匿名で実施され、保護者が記入後、封筒に封をし、各学級で回収される。回答方法は5件法で(5.よくあてはまる 4.あてはまる 3.あまりあてはまらない 2.まったくあてはまらない 1.わからない)マークされ、自由記述欄もある。アンケート項目の中でSGHに関係のある質問項目について調査結果を記載する。下記のグラフは2015年度(SGH1年次)から2019年度(SGH5年次)の経年変化である。下の表は、「よくあてはまる」のみを抽出したデータである。

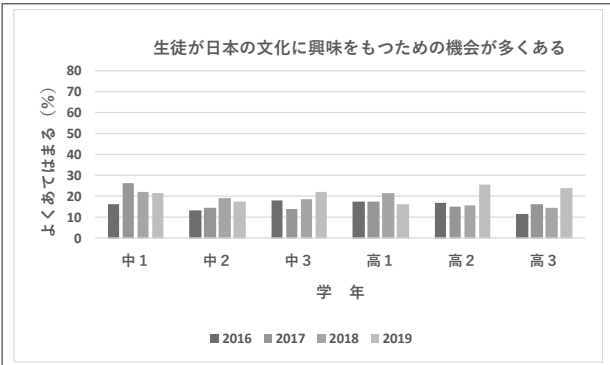
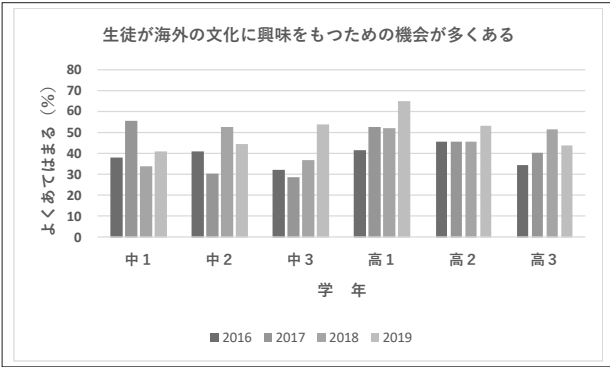
(課題研究に関して)



中学1年から高校3年まで一貫してSGH課題探究を実施している。生徒の課題研究成果発表を学年末に行い、多くの保護者が参加するため、学校教育での概要を保護者は十分理解している。また、学校行事に保護者が関わってくれる頻度も多く、学校と家庭が協力して実施しているため、学校の取組に関して肯定的な考えをもっている保護者も多い。ほとんどの項目においてSGHを開始した2015年では相対的に低かった項目もSGHを継続的に実践していくにつれ、年度ごとの相違はあるものの、保護者のSGH教育に対する理解が深まっていることがわかる。特に入学したての中学1年生の保護者は、学校に来て行事に参加する機会も多いため、肯定的な意見をもつ。受験学力ではなく、本校の教育方針「心豊かで主体性のある人間形成を目指す。自由と自主を尊重し、確かな学力と自立する力を育てる」ことを理解して子どもを入学させていることにも由来する。

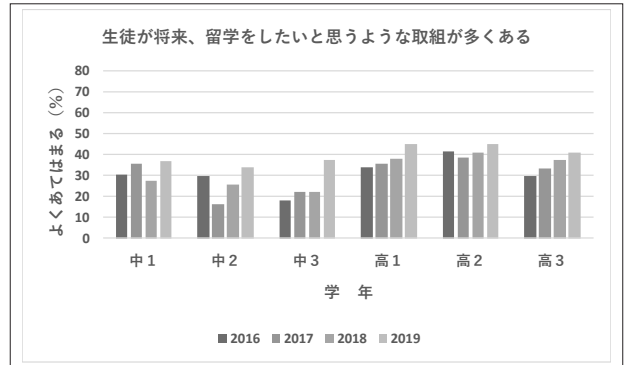
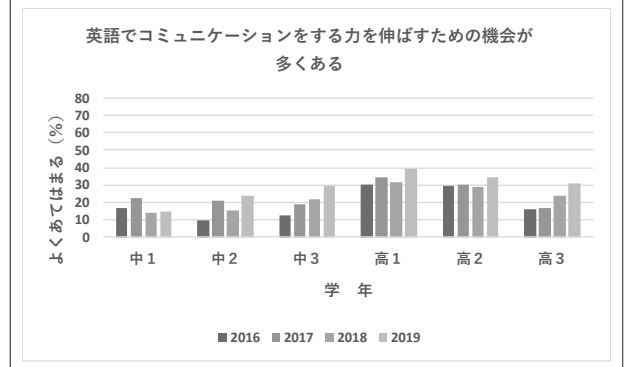
「総合人間科での研究が大学の専攻選択に影響を与えた」と回答をした卒業生アンケート結果にもつながることであるが、高校3年生保護者も「生徒が自分の将来や生き方について考える機会が多くある」「生徒が答えのない課題に取り組むための機会が多くある」と本校のSGH課題研究を支持する保護者も多い。課題研究を通して生徒がキャリア形成をしていることを肯定的に捉えている。

(SGH企画に関して)



「海外の文化に興味をもつための機会に関しては、海外研修や、留学生の受け入れを多く行っているため、「よくあてはまる」と感じている保護者も多くいる。一方、「日本文化に興味を持つための機会」を本校が実施していることも保護者に理解してもらうことが本校の課題であった「海外の文化」に対して「よくあてはまる」と回答した保護者は少ないが、2016年度を基準として、年々その数が増加していることがグラフからも分かる。海外からの留学生が年間を通して非常にたくさん本校を訪問し、日本文化を紹介することや、海外からの留学生との交流をとおして、自国文化を意識する機会がふえていくことが理由であると推測する。また、留学生に着付け、お茶・お花を紹介する際に、保護者ボランティアに依頼することが多くなったことや、講師の先生を招き全学年向けに「日本文化体験講座」を年複数回開催したことで保護者の認知度が少しずつではあるが年々高くなってきていると考える。「海外の文化に興味をもつ」機会を増やすことは、次の項目にもある「英語でのコミュニケーションの機会」や「将来海外留学をしたいと思う」といった項目にもつながる。長期・短期の留学生を多く招き入れているが、その度ごとに本項の生徒と交流を持つ機会を設けている。数学や英語の授業に入り、グループを組んで課題を協同で解いたり、家庭科実習を協同で行ったりという活動を組んでいる。それらの活動が、保護者にも認知されてきている。

(外国語関係について)

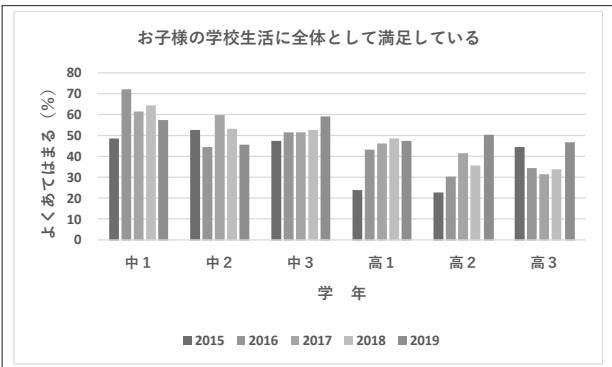
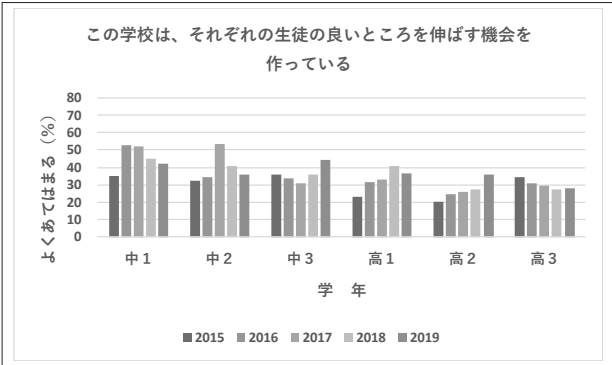


「英語でコミュニケーションする機会が多い」「将来留学をしたいとおもうような取組」に関して、中学生の保護者よりも高校生の保護者のほうが「よくあてはまる」との回答が多い。本校が行っているALE (Active Learning in English) やGlobal Discussion の主な対象者が高校1年と2年を対象としているからだと考える。長期の留学生受け入れは、高校への受け入れだけで、中学には受け入れていないため長期留学生と中学生がふれあう機会は高校生と比べて少ない。しかしながら、短期留学生は、中学生との交流を比較的多くしている。英語運用力の観点から中学1年生や2年生と交流する時間が短いことも「英語でコミュニケーションする機会が多い」と感じている保護者が少ないことの原因だと考える。「将来留学をしたいとおもうような取組」に関しては、本校で「トビタテ留学JAPAN」を積極的に展開していることも大きな理由だと考えている。「トビタテ留学JAPAN」への申請者も増加(2018年度5名 2019年度10名)し、実際にまた、「トビタテ留学JAPAN」を利用して海外へ留学に出かける生徒も年々増えている(2018年度1名 2019年3名)。「トビタテ留学JAPAN」でのカテゴリーも3名中2名が「スポーツ・芸術」「国際ボランティア」と自分の将来のキャリアを見据えて応募していることが特徴である。それらの取組に対する知名度が、校内で年々向上していることも理由の1つである。実際に在学中に長期留学している生徒も年々増加している(2017年度5名 2018年度2名 2019年度6名)。

近年、卒業後に海外の大学に進学した生徒も少ないながら出てきた(2017年度1名 台湾、2019年度1名 英

国)。また、在学中に進路変更で海外の高校へ編入する生徒も出てきたことはこれまではなかった傾向である(2018年度1名 オーストラリア、2019年度1名 米国)。生徒本人の意志もあるであろうが、生徒の意志を理解しサポートする保護者が増えてきたことは成果である。

(総合的な評価について)



SGHをスタートした2015年度から、各学年においてグラフが毎年伸びていることがわかる。中学1年生の保護者にとっては、1年が経過し子どもの学校生活に満足をしている様子が分かる。高校生になると、「生徒のよりどころ」という質問項目の内容がやや曖昧なためか「よ

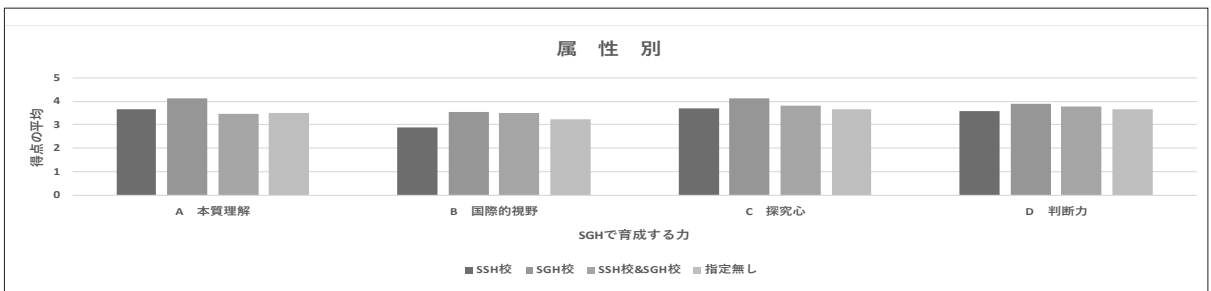
くあてはまる」という回答が低めではあるが、年々割合が増えている。後項3年生になると受験期のためもあり保護者の関心も大学進学に移るため、横ばい傾向にあるが、「学校生全般に満足度」は各学年を通して高い傾向にある。特筆すべきは、年々その回答率が上昇していることである。これは、学校での活動やイベント、それに教育方針が文字上の表現だけでなく実態が伴い実質的になってきたことであると考えられる。SGHを始めることにより、これまで以上に学校が目指すべき方向が明確化しそれに向かって実際に行動に移しているが故の結果であると考えている。これまでは、社会全体にとって、閉鎖的なイメージが学校にはまもっていたが、保護者の支持をえることは保護者の協力につながり、それがさらに社会に開かれた学校へと行こうしていくことがSGHを開始して実感として教職員全体が分かるようになってきた。これは、「第7節 実施の効果とその評価」で記載した教員の意識変化からもわかる。

### 3 教育実習を実施した名古屋大学学生との比較

#### (1) 名古屋大学学生(教育実習実施者)の属性による比較

2019年度、教育実習を行った名古屋大学大学生・大学院生90名に、附属学校で行っているSGHで育成する力をはかるための「意識調査」を実施し、附属学校の高校3年の生徒と比較検討をした。調査項目は、「物事の本質をとらえる力」「探究心」「国際的視野」「判断力」についてである。5件法(5:とてもよくあてはまる、4:よくあてはまる、3:あてはまる、2:どちらともいえない、1:あてはまらない)で測定した。学生の属性は、SGH校出身者、SSH校出身者、SGH/SSH両方指定校、非指定校出身者で区分した。

	SSH校			SGH校			SSH&SGH校			指定なし		
	n	mean	sd	n	mean	sd	n	mean	sd	n	mean	sd
A 本質理解	27	3.65	0.91	6	4.11	0.67	10	3.47	0.96	47	3.51	0.79
B 国際的視野	27	2.88	1.1	6	3.54	0.65	10	3.5	0.93	48	3.22	0.73
C 探究心	27	3.7	0.94	6	4.13	0.7	10	3.82	0.83	47	3.67	0.71
D 判断力	27	3.59	0.81	6	3.9	0.52	10	3.78	0.77	46	3.67	0.65

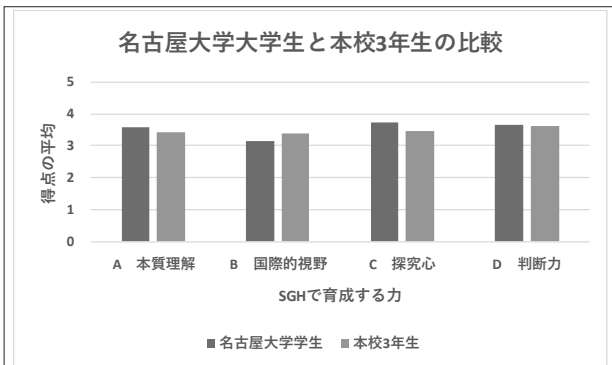




現在大学4年生が中心のため、出身校がSGHに指定され1・2年目の学生がほとんどである。そのため、SGH校出身者の数が少ないため、統計的には課題があることは認識しているが、傾向として見ていただきたい。SSHやSGHの指定を受けている高校出身者のほうが、指定を受けていない高校出身者よりも多くの項目において意識が高いことが分かる。特にSGH校出身者は6名だけではあるが、どの項目に関しても意識が高いことがわかる。高校ごとのカリキュラムを精査していないのだが、SSH校やSGH校は必ず課題研究を行っているために、課題研究を実施しているかないかが少なからずアンケート結果に影響を与えているのではないかと考える。

**(2) 名古屋大学学生（教育実習実施者）と附属学校生徒の比較検討**

	名古屋大学生			本校3年生		
	n	mean	sd	n	mean	sd
A 本質理解	90	3.59	0.84	111	3.41	0.82
B 国際的視野	89	3.15	0.78	106	3.40	0.97
C 探究心	90	3.73	0.79	111	3.46	0.83
D 判断力	89	3.67	0.65	106	3.61	0.74



大学生と比較検討をした理由は、附属学校で行っている「意識調査」の一般化の可能性と、将来教職に就くことを希望している学生の「物事の本質をとらえる力」「探究心」「国際的視野」「判断力」を調査することである。大学生は2019年度に教育実習を実施した大学生/大学院生である。上記の結果からもわかるが、多くの項目で名古屋大学学生の意識が附属高校3年生よりも高いことがわかる。しかし、国際的視野に関しては、附属学校3年の方が高い。名古屋大学はこの地域の中心となる大学であり、愛知県内の高等学校の中で名古屋大学出身教員の数が多い。その大学生とほぼ同じような高い意識を本校生徒は持っていると言える。そのため本校が「育成しようとしているSGHの力」にも妥当性があると言える。  
(文責 三小田博昭)